
Fate/last night

赤い人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate/last night

【Nコード】

N1935Y

【作者名】

赤い人

【あらすじ】

Fate/stey nightの次の話を書いてみました。新たな聖杯を求める『第六次聖杯戦争』……その勝者となる人物はいかに!? どんな英霊が召喚されるのか!? Fate/stey nightのキャラクターはどんな出方をするのか!? こうご期待ください!!

#なお、up主はFate/zero著作の虚淵玄のファンなので、三人称で書かれております。

成り立ち

聖杯戦争 始まりの御三家、遠坂・間桐・マキリ・アインツベルン。その御三家の魔術師が冬木市に召喚させた万能の願望器『聖杯』を巡る血で血を洗う決闘劇。第五次聖杯戦争を機に大聖杯は破壊され、聖杯戦争は誰の希望も叶えることなく、真の終結をしたかに見えた。ところが60年後、聖杯は始まりの御三家はおろか^{セカンドオーナー}管理者たる遠坂家ですら覚えのない謎の聖杯が出現。今宵、新たなる『聖杯』を巡る第六次聖杯戦争が幕を開ける

千堂家の事情

九年前

今更だが、代を重ねてまで聖杯に執着していたのは、アインツベルンだけではなかったという事実が存在した。アインツベルンより代は薄いが、千堂家と呼ばれる魔術師の家系も聖杯という願望器に執着していたのだ。しかしアインツベルンはおよそ何百年という月日の研究を聖杯に向けていたに対し、千堂家は第一次聖杯戦争が始まった頃から研究を始めていたため、アインツベルンの研究に追いつくはずもない。そう思った千堂家は、ある一つの反則的な方法を考えていた。

模倣である。アインツベルンの……否、始まりの御三家の聖杯の研究を糧に研究しようとしたのだ。

結果として、およそ2000年による研究により、四代目当主・千堂光沢の手によって始まりの御三家の『聖杯』に最も近い疑似聖杯は完成に至ったのだ。……しかし、問題は別にあつた。その聖杯が完成したのが、第五次聖杯戦争の終了直後だったことである。よって聖杯を現界させるための魔力をためるのにおよそ六〇年という月日をかけてしまう。その結果、千堂光沢は聖杯戦争の魔術師として選ばれることはなかったのだ。

そして現在、つまり新たな聖杯を巡る聖杯戦争はあと九年にまで迫っているながら、すでに八五になる千堂光沢は、聖杯を求める魔術師として選ばれていない。またたとえ聖杯に選ばれていたとしても、すでに光沢は余命一年の宣告を受けていた。しかし代わりに、光沢にとつてとても望みがたい人物が聖杯に選ばれる証拠『令呪』を宿していたのが、我が息子であり我が弟子、千堂光輝その人である。いまだ成人にも満たない彼を殺し合いである聖杯戦争に参加さ

せることを、千堂光沢は強く拒んでいたし、光沢自身、聖杯戦争に参加したかったという本音もある。

だが、光輝が選ばれてしまったからにはもうどうすることにもできない。千堂家の悲願を達成するため、光沢は息子であり弟子である光輝にできる限りの魔術を教えた。だが、そこで嬉しい誤算があった。光輝の魔術師としての才能は、代が薄いため魔術回路の恩恵が受けられない千堂家にとって、フリーランス時代に別名を『衛宮切嗣の再来』と呼ばれた光沢でさえ上回る実力を持つであろう少年だったのだ。

これを踏まえ、光沢は我が息子を最強の魔術師にせんとひたむきに努力した。結果、光輝は魔術師としてとてつもないほどの魔術師となったのは言うまでもない。

そしてこの世に未練を残さず役割を果たしたこの男は、我が弟子に最後の言葉を贈って息を引き取った。

「次が最後の聖杯戦争だ。我々の果たしたかった聖杯の召喚を目撃し、研究を成功させてくれ」

かくして千堂光輝は、聖杯の召喚をこの目で見ることで一族の研究を完成させるといふ使命を負わされた。自身もそれを喜んだが、それ以上に嬉しかったことが二つあった。一つは、自身の欲望を叶えられること。この点については、ほかの参加者も同意であろう。もう一つは、英霊の召喚である。たとえ信仰心や知名度によって存在が成り立つ英霊だとしても、彼らの伝説を聞くことが出来るのはとても素晴らしいことだと思っていた。そして、彼が一番召喚したいと思っていた人物は『ジャンヌ・ダルク』だった。

聖処女ジャンヌ・ダルク。召喚すればおそらく剣の騎士セイバーのクラスとして召喚されるであろう英霊。フランス革命後の悪名高きジル・ド・レエと共に果たした英雄であり、異端として火刑によって成人にも満たぬ若さで死んだ悲しき少女。その彼女の経歴や心情を本人

から聞きたかったのだ。

まだ小学校に入ったばかりの少年は、右腕に刻まれた令呪を抱きながら、九年後に控える聖杯戦争を楽しみにしていた。

間桐家の事情

三年前

間桐臓硯は卑劣な外道であった。

すでに御年257歳を迎える臓硯は、第一次聖杯戦争から見守つてきた男であり、延命に延命を重ねた結果、人間と言う枠から外れ妖怪となった男だ。

聖杯の為ならどんな汚い手でも惜しまず行い、聖杯戦争に勝つたためなら娘や息子にまで手をかけ、また大聖杯が破壊されて一時自身の生きる意味を失った臓硯はこのご老体のために認知症が進行してしまつが、娘たちに令呪が宿った日から日に日に認知症が改善されたという、まさに聖杯のために生きるでも男だった。

そして現在、この外道は次なる聖杯戦争に向けて娘たち魔術の教育を行っていた。そう、拷問という名の教育を。

「ふんふん、順調じゃのう」

間桐臓硯は高台から一人の娘を見下ろしていた。自身の孫、間桐咲野が蟲に嬲られる姿を。

「お爺さま。咲野の調子はどう？」

唐突に、間桐臓硯の後ろから女性の声が聞こえてきた。咲野の姉、間桐楓である。

「おお、楓か。なかなか素養があるやつじゃのう。ここに入れて三日間蟲に嬲られておるがまだ息がある。楓より素養はないくせに、なかなかしぶとい」

「へえ、咲野すごいじゃん。腐っても間桐の人間ってことね」

「そうじゃのう……」

と、咲野の事を蔑むような言い方をした臓硯だったが、楓に対し

て一つ嘘をついていた。実は姉の楓よりも、今下で蟲に嬲られていた咲野の方が、俄然魔術師としての素質があった。問題は、彼女の持つ属性と素養にある。

話変わって、彼女たちの祖母に当たる人物、遠坂家から養子として引き取った間桐桜は、もともと遠坂としての素養があったため、間桐臓硯が飼育する蟲に嬲らせることで間桐よりの魔術師にしようと思論んでいたことがあった。そして今、咲野にやっていることもそれとほぼ同じことだった。咲野もまた、間桐に生まれながら遠坂よりの属性や素養だった。具体的に言えば、咲野の持つ『虚数』の属性は元々遠坂の一族にいた桜の持っていた属性が継承ものである。なので臓硯は、咲野のその遠坂よりの素養を間桐よりの素養に戻そうとしていたのである。

しかし、だからと言って楓には素養がないわけではない。その逆、楓は間桐の素養はまさしく本物だった。間桐家の持つ『吸収』の属性を存分に継承しており、蟲に嬲らせる必要がなかったのが本音である。

そして二人の右手の甲には、令呪が刻まれている。

間桐臓硯は確信していた。次の聖杯戦争、必ずや勝ち取れる

！

遠坂家の事情

同じく遠坂も、次の聖杯戦争に向けて準備が行われていた。令呪を刻んでいたのは遠坂誠　遠坂凜の孫である。

『根源』の到達　遠坂家自体の悲願であり、遠坂凜が父から受け継いできた私情の悲願でもある。また孫の誠も、その悲願に賛同してくれたただ一人の孫だった。

遠坂の悲願を達成するため、また自分の悲願を達成するため、そして息子の賛同を犠牲にしないため、凜は誠にすべての魔術を伝授させた。

遠坂家、および現当主である遠坂凜は、これ以上のチャンスは絶対がないと思っていた。

第五次聖杯戦争を機に聖杯を降臨させる大聖杯は、第五次聖杯戦争にセイバーとして召喚されたアーサー王の宝具によって破壊された。しかし聖杯が降臨する予知を意味する令呪が、今ここに孫の遠坂誠に刻まれている。冬木市の管理人である遠坂セカンドオーナーですらこのことについて予知できなかったということは、

何者かが我々の聖杯に関する技術を模倣し、それをこの地で降臨儀式を行った、

ということになる。

始まりの御三家が何百年かけて完成させた聖杯システムを、模倣によってなんの苦勞もせず発動させたことに対し、遠坂凜はまるで阿呆を見るように呆れ、また自分のプライドをズタボロにした者を許さぬように憎かった。

遠坂凜は思った。次の聖杯戦争、その者だけは地獄に追いやってやる　！

アインツベルンの事情（前書き）

補足

イリヤスフィールがなぜ高齢でありながら若々しいのかと云うと、生を受ける前に調整を受けたためであり、また成長とともに老化も著しく遅かったため、本来人間なら老化の影響が強く表れる年齢であつても若々しい美貌を保っている。しかし、寿命と成長・老化はイコールで結ばれているわけではないので、元気ではあるがすでに余命はわずか5年。

アインツベルンの事情

極寒なる凍土の地、古城に住むアインツベルンの一族は、今までの苦勞をすべて塵屑同然のように捨て去っており、もうすでに聖杯の奇跡を追い求めてはいなかった。

以前までアインツベルンの当主たる人物、延命に延命を重ねずで人間という概念から遠く外れていたユーブスタクハイト・フォン・アインツベルン、通称『アハト翁』は、大聖杯の破壊と共に自分の存在価値を失い、それまでの魔術による延命をすべてシャットアウト、大聖杯が破壊された一週間後、寿命によって息を引き取った。

そして今、現在アインツベルンの当主たる人物は、すでに御年78歳でありながら、実に若々しい美貌を誇っていた九代目当主、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンだった。以前の60年前に行われた聖杯戦争にて、狂戦士（バーサーカ）のクラスで召喚されていたギリシア神話の大英雄・ヘラクレスのマスターとして参加していた女性だった。

そして今回、彼女の右手には令呪が宿っている。つまりそれは次の聖杯戦争に参加する義務を負ったのとほぼ同じ意味合いを持つ。すでに聖杯に対する興味すら失せていたアインツベルンにとって、あまりにも無意味なことだった。少なくとも、アハト翁によって作られた人造人間たちはそう思っていた。

しかし、イリヤスフィールは神に与えられた最後の好機チャンスと捉え、聖杯戦争に参加することを決意していた。が、実のところ本音は別だった。

前回の聖杯戦争で、イリヤスフィールの事実上弟であった衛宮士郎の体に溶け込んでいた、かつてアーサー王の持つ魔法の鞘を回収し、実は女性であったアーサー王、兼アルトリア王の拠り所として所持していたのだ。

ところで聖杯戦争における考案者の間桐臓硯が作ったサーヴァン

トシステムは、英霊を召喚する際に、特定の英霊と何かしら接点がある聖遺物を触媒にすれば、その特定の英霊を召喚することが出来る。つまり、その魔法の鞘を触媒にすれば、聖杯の加護下の中かの騎士王アルトリアをこの地に現界させることが出来るのだ。イリヤスフィールにとって、すでに聖杯に対する興味も願望もなかった彼女にとって、聖杯戦争自体より彼女に久しく逢う事の方が楽しみだった。

ある年老いた乙女たちの密会

一年前

新たなる聖杯戦争幕開け、の一年前に、人知れず遠坂凜と間桐桜は密会していた。密会という形にしていたのは、すでに二つの家柄の関係が緊迫していたものとなっていたからだ。

遠坂家・間桐家ともに聖杯の召喚に貢献した始まりの御三家の枠組みに入る家柄であり、共に聖杯を追う者だからだ。間桐桜はすでに家の方針に流されているだけだが、遠坂凜は本気で聖杯を追い求めている。そんな二人がなぜ密会しているのかというと、単に彼女たちの関係が姉妹であることに変わりはない。心配し合う二人、たとえ老いぼれても理由はそれだけで十分だ。だからこそそこに、聖杯戦争にかかわる話は今までなかった。だが、今日は違った。

「間桐家の陣営はどうなってるの？」

不意に、遠坂凜は間桐桜にそんなことを聞いた。

間桐桜は困惑していた。今まで、そんなことを聞いてこなかったはずなのに。

「どうしてそのことを聞くんですか？ 姉さん」

「いや、そろそろ聖杯戦争も近いからねえ。聞けるうちに聞かないと」

遠坂凜も、ずいぶんと悩んだ末の結論らしい。別に桜を間桐家のスパイに使うつもりはなかったが、彼女ならわかってくれると思っ
て話しかけたのだ。しかし、

「……できません」

間桐桜はそう答えた。別に遠坂凜が敵だから、というわけではない。脅迫されていると考えているからだ。すでにこの密会、間桐臓硯にばれていてもおかしくない。それでも桜の身になにも起きない

のは、ただ単に無駄話するだけで、聖杯戦争に関する自らの事は何も言わなかったからだ。

遠坂凜は「そう……」とだけ言って、間桐桜から目を背けた。別に断れることだと思っていて発言していた。彼女もまた、今日を含めた今までの密会を、間桐臓硯にばれている物だと思っており、桜に危険な目に会ってもらいたくないと思っていたからだ。

しかしおかげで、大分空気が悪くなってしまった。そこで遠坂凜は、

「咲野ちゃんは元気？ あの子、子供の時の桜みたいに気弱だったから」

ふと思いついた間桐咲野の話を、間桐桜に振ってみた。ところが、
「……………うっ」

突如、間桐桜は涙を流していた。必死に堪えているようだが、涙は止まっていない。

「ちょ、どうしたの桜？」

急なことだったので、凜は桜を心配し、とりあえず事情を聞いた。すると、彼女の口からとんでもない事が告げられた。

「……………蟲に嬲られてる？」

「はい…………。咲野は私と同じく、遠坂の血を強く受け継いだ子なので、間桐よりの魔術師するために…………」

「なんてひどいことを…………」

遠坂凜は桜に共感し、間桐臓硯を憎んだ。実の妹だけでなく、妹の孫娘さえ手を出すとは、間桐臓硯の人としてのモラルを疑った。しかし、何もできなかった。

いくら彼女たちが事実上血のつながった姉妹とはいえ、桜は間桐に引き取られた時から、すでに彼女たちの関係は他人であった。同盟関係もすでに切り捨てられ、すでに彼女たちは、聖杯を巡る敵同士である。だから凜は、桜を慰めることしかできなかったのだ…………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1935y/>

Fate/last night

2011年11月16日03時17分発行